

Title	ヴィシー体制と「フランス社会進歩（PSF）」（2）
Author(s)	竹岡, 敬温
Citation	大阪大学経済学. 2011, 61(2), p. 16-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53786
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ヴィシー体制と「フランス社会進歩 (PSF)」(2)

竹岡敬温[†]

8. レジスタンスへ

1942年4月のピエール・ラヴァルの政権復帰によって、ヴィシー政府は対独協力に大きく舵を切った。ラヴァルが、5月26日にアルザスとロレーヌの放棄を声明し、6月22日には、「ボルシェヴィズムの進出から世界を守るために」、対ソ戦におけるドイツの勝利を願っていると声明したのにたいして、ド・ラ・ロックは6月25日の『ル・プティ・ジュルナル』紙で、首相のラヴァルは「ヴェルダンの勝利者の名において自分の考えをのべる権限をあたえられた・・・われわれの死活にかかわる利益と名誉を尊重すると約束していたのだが¹⁴⁶⁾」とはっきり皮肉と分かる所見をのべた。おそらく、この頃、1942年夏頃までには、ド・ラ・ロックと多くのかれの同僚たちは、ヴィシー政権の重要政策のひとつ——対独協力——を拒否し、情報収集というかたちで、対独レジスタンスへの活動を組織するまでになっていたとおもわれる。その活動がいつ開始されたのかは明確ではないが、おそらく1942年が、ド・ラ・ロックとかれの運動組織にとって決定的な年であったとおもわれる。おそらく、この年からド・ラ・ロックの対独レジスタンス活動が開始されたようにおもわれるからである。

戦後、フィリップ・マシュフェールがえた元情報局の将校ジョルジュ・シャロドー大佐の証言¹⁴⁷⁾によれば、シャロドーはスペイン内戦時

代にフランス大使館員としてマドリッドに滞在したことがあったが、その後、1940年6月29日にフランスからイギリスに渡ったとき、フランスにかんする情報収集の依頼を受け、諜報組織「アリバイ網」をつくった。シャロドーはPSFのいくにんかの幹部、とりわけ政治局長のエドモン・バラシャンの提案で、1942年7-8月に、ド・ラ・ロックと連絡を取るようになり、「アリバイ網」の代表であったかれは、ド・ラ・ロックから情報を受け取り、ド・ラ・ロックに資金を渡すことになったという。ド・ラ・ロックと連合国軍とのあいだで直接の連絡はなかったが、「アリバイ網」に提供する情報がPSFの諜報員たちによって集められた。それは、1942年6月にド・ラ・ロックがつくりあげた「クラン網」という秘密のレジスタンス組織であった¹⁴⁸⁾。しかし、ド・ラ・ロックには、ヴィシー政府やドイツ占領軍の注意を引かないように、かれの表面的な活動をすこしも変えないよう勧告されていたという。

ジャン・ドルセー（元国民義勇軍のメンバーで、『ル・プティ・ジュルナル』紙編集者のひとり）によれば、ド・ラ・ロックは、すでに1940年9月から、連合国軍を助けることのできる情報を集めるようドルセーに要求していたという¹⁴⁹⁾。しかし、ジャック・ノベクールによ

¹⁴⁸⁾ 剣持前掲書, pp.172-174.

¹⁴⁹⁾ J. d'Orsay et J. Brumeaux, *op. cit.*; Ph. Machefer, *op. cit.*, pp.50-51; Jean Brumeaux, *La Rocque citoyen*, Saint-Etienne, n. p., n. d., p. 53; Association des Amis de La Rocque, *Pour mémoire ... La Rocque, Les Croix de Feu et le Parti Social Français*, Imprimerie des Orphelins Apprentis d'Auteuil, Auteuil, 1985, pp.19-20; R. Soucy, *op. cit.*, pp.122-123, (traduction française) *op. cit.*, pp.187-

[†] 大阪大学名誉教授

¹⁴⁶⁾ *Le Petit Journal*, 25 juin 1942.

¹⁴⁷⁾ Ph. Machefer, *op. cit.*, pp.50-51.

れば、ド・ラ・ロックとシャロドーとのあいだで規則的な接触が始まったのは1942年初め以前ではなく、フィリップ・マシュフェールも、1942年以前にド・ラ・ロックたちの情報収集活動がおこなわれたと信じてはいず、ド・ラ・ロックとかれの仲間たちがこの種の活動を持続的におこなうようになったのは、アメリカ参戦後のことである、と書いている¹⁵⁰⁾。実際には、1940 - 1942年には、ド・ラ・ロックは2つの態度を使い分け、そのように行動することによって、この間、公に発表した文章では、連合国軍の立場を非難することも、ドイツ占領軍との協力を勧めたりすることもあったのであろう。しかし、1942年には、ド・ラ・ロックははっきりと陣営を変えたとおもわれる。

危険を伴う「クラン網」の仕事は、注意深く進められた。情報はさまざまな情報源から集められた。情報収集活動では「愛国奉仕団 (ADP)」が重要な役割を演じたように伝えられているが、少数のメンバーしかかれらの活動の本当の意味に気づいてはいなかった。情報はまた、フランス軍諜報機関の支局で、「怪しい人物」を監視する「反国家的陰謀捜査局」やパリの「ドイツ休戦委員会」にもぐり込んだPSFのメンバーからも寄せられた。情報が集められると、ド・ラ・ロックはそれをスペインの「アライバイ網」の責任者で、イギリスの秘密諜報機関と協力していたシャロドー大佐に送った¹⁵¹⁾。どのような情報が集められたかについては、戦後、PSFの活動家たちが、情報にはノルマンディー地方の地下飛行場、その他の軍事施設についての詳細が含まれ、連合国軍からはかれらの情報をもっと送ってくれるよう定期的に懇請があった、と主張している。かれらはま

た、「クラン網」はフランス本国における4つのもっとも重要なネットワークのひとつであったとのべている¹⁵²⁾。

ドイツ降伏後、イギリスの政府機関、英仏連絡局は、「クラン」という名のネットワークの活動と、ド・ラ・ロックが、1942年6月1日から、1943年2月にかれがドイツ軍に逮捕されるまで（後述するように、実際には、ド・ラ・ロックの逮捕は1943年3月）、イギリスに情報をもたらしたとはっきりのべている¹⁵³⁾。しかし、戦後のフランスでは、陸軍省の公式報告書に掲載されたレジスタンス組織のリストでは、ド・ラ・ロック中佐の「クラン網」は公認されず、その存在の暗示すらもない。おそらく、ド・ラ・ロックの戦前最大の極右同盟の領袖としての活動、ヴィシー政権下での対独協力と明白な反ド・ゴール派の姿勢が影響したのであろう。

しかし、アメリカ参戦（1941年12月）がド・ラ・ロックに連合国軍の最終的勝利を予想させたとおもわれる瞬間から、また、ヴィシー政権にたいするドイツ占領軍の支配が強化され、対独協力についてかれが主張していた意見と相容れなくなったときから、ド・ラ・ロックのレジスタンス活動は開始されたとおもわれる。その活動は戦後、1961年4月30日に、ド・ゴール政府によって、かれがドイツの強制収容所に送られたことの証明書と勲章がかれの未亡人の手に手渡されて、はじめて認知されたと考えることができよう。その機会にド・ゴールがド・ラ・ロック夫人宛てに書いた、1961年4月18日付のつぎのような手紙が公表されている。「わたしは、この機会に、あなたの夫の遺徳を褒めたたえたい。レジスタンス活動が理由で敵があなたの夫に強制収容所に監禁する

188.

¹⁵⁰⁾ J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.820-822; Ph. Machefer, *op. cit.*, pp.49-51.¹⁵¹⁾ J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.820-824; Paul Paillole, *Services spéciaux (1935-1945)*, La Table Ronde, Paris, 1975, pp.224-369.¹⁵²⁾ *Archives Nationales*, F⁷ 15284, note, 7 juillet 1945; F⁷ 15287, note, 16 juin 1945.¹⁵³⁾ *Archives Nationales*, F⁷ 15287, A. I. Thomas, Anglo-French Communications Bureau, attestation, 11 juin 1945.

というひどい苦しみを受けさせたこと、その苦難と犠牲はフランスのために役立ったことをわたしは知っています¹⁵⁴⁾。」

1942年中頃、ド・ラ・ロックは、北部占領地区への視察旅行を計画し、同地区でノエル・オックヴィの指導下で活動していたPSFの組織を視察している。かれはボルドーからオルレアン、トゥール、ナント、レンヌ、プレスト、ソヌ・エ・ロワール県、コート・ドール県をまわり、リールとルーベで旅を終えたが、各地域のPSFの幹部たちへの談話のなかで、「フランス人としてとどまりたまえ」という言葉を繰り返しのべている¹⁵⁵⁾。

ボルドーではそれぞれ200人が出席した2度の非公式集會が開かれたが、ドイツ軍の捕虜となったあと釈放され集會に参加していたメンバーに向かって、「あなた方が敗者ではないことを忘れないように。現在、この国に敗者はいません。1940年に大きな戦いがあり、われわれは不運を甘受したが、しかし、繰り返しますが、あなた方は敗者ではなく、まだなにも終わってはいないことをよく覚えていて下さい」と話しかけたという¹⁵⁶⁾。また、ヴィシー政府が対レジスタンス用に組織した親独「民兵団（ミリス）」や「反ボルシェヴィズム・フランス義勇軍団」に加盟したすべての者を、「ドイツ軍の制服を着て奉仕するのは兵士の名誉にかなってはいないから」といって、PSFの名簿から抹消するよう厳命した¹⁵⁷⁾。

諜報活動についてはきわめて慎重であろうとつとめたにもかかわらず、ド・ラ・ロックは、このように、PSFの集會では、かれの支持者たちを前にして、感情を隠すことが困難だったよ

うであり、占領地区旅行中の1942年9月、ヨヌ県オーセールでの集會で、ド・ラ・ロックが「ドイツ軍政当局に譲歩することには躊躇を覚えざるをえない」と語ったというニュースは、ドイツ大使オットー・アベッツの側近たちを驚ろかせ、かれらにド・ラ・ロックとPSFにたいする警戒感をもたせることになった¹⁵⁸⁾。

占領地区の視察旅行後、ド・ラ・ロックは、PSFの副委員長で、元フランス社会党（PSF）の宣伝部長で下院議員でもあった古くからのかれの協力者、シャルル・ヴァランがロンドンに亡命したことを知った。このニュースを知ったとき、ド・ラ・ロックは、かれがしばしば「わたしの息子」と呼んできた人物によって、「暗闇で背中を短剣で突きさされたようなショック」を受けたと告白している¹⁵⁹⁾。ヴァランが、1942年9月21日に、イギリス放送協会（BBC）でラジオをつうじて最初のスピーチをおこなった数日後のことであった。

「これまでもっとも汚い不正も黙殺し、もっとも卑劣な中傷には敢然と立ち向かったが・・・最大の裏切り者ポツ・ディ・ボルゴにたいしてさえも“失われた友情を尊重”してきた¹⁶⁰⁾」ド・ラ・ロックであったが、ヴァランの行動は許せなかった。各県支部委員長に送った通達では、ド・ラ・ロックは、ヴァランがPSFの「きわめて重要な行動指針」に背き、その副委員長のポストを辞任することさえしないで、「言語道断な態度」をとったことを咎められるべきであると主張した。

シャルル・ヴァランはいつロンドンに亡命したのか、かれのロンドン亡命にいたるまでの行動をあきらかにしておきたい。

1942年5月か6月に、ヴァランはかれが外

¹⁵⁴⁾ Cit. par E. et G. de La Rocque, *op. cit.*; Ph. Machefer, *op. cit.*, p.50.

¹⁵⁵⁾ *Le Petit Journal, directeur La Rocque, acquitté en Cour de justice, op. cit.*; Ph. Machefer, *ibid.*, p.57.

¹⁵⁶⁾ 『ル・プティ・ジュルナル』紙裁判でのニコライ夫人の供述。

¹⁵⁷⁾ 同上。

¹⁵⁸⁾ *Archives Nationales*, 2AG 449, note, 14 septembre 1942.

¹⁵⁹⁾ *Le Petit Journal, directeur La Rocque acquitté en Cour de justice, op. cit.*, Ph. Machefer, *op. cit.*, p.52; 剣持前掲書, pp.174-175.

¹⁶⁰⁾ J.Nobécourt, *op. cit.*, p.839.

国に亡命するかもしれないことをド・ラ・ロックに打ち明け、その意見を打診していた。これにたいして、ド・ラ・ロックは、ヴァランに、そのようなことは絶対しないように懇願し、「もしあなたがそのようなことをしたならば、わたしは党から捨てられてしまうだろう」と答えたという。7月初めから、ヴァランは警察に尾行されはじめ、南仏のカヌスで、「愛国奉仕団 (ADP)」のアルプ・マリタイム県支部委員で、かれと行動をともししてイギリスに亡命することになる友人アンリ・デュティの家で半ば身を隠した生活を送っていた。

ド・ラ・ロックは、ヴァランがなんの説明もせずに半月も姿を消していることを心配し、エドモン・バラシャンを介して、「そのことでかれが悲しい思いをし、心配している」ことをヴァランに知らせた。しかし、アジン (ロ・エ・ギャロンヌ県) で投函されたヴァランの手紙がド・ラ・ロックに届いたのは、8月7日にすぎなかった。それ以前に、ヴァランは、7月14日付で、「あなたがこの手紙を受け取られるときには、わたしはド・ゴール將軍と合流していることでしょう。この知らせは、きっと、あなたをひどく悲しませることでしょう」という言葉で始まり、「わたしがこれからもあなたに熱狂的に結びつけられたままでいるといっても、あなたを侮辱したことにはならないでしょう。あなたはそれを疑うことはできません。わたしの心はいまめちゃくちゃに混乱していますが、意識は平安であり、PSFとフランスのために神があなたを守ってくれるよう祈りながら、わたしは出発します」という言葉で結んだ。ド・ラ・ロックとPSFを思う真情あふれた長文の手紙をド・ラ・ロックに送っていた。

ロンドンへの出発ははじめは8月初めに予定されていたが、ヴァランとかれに同行する仲間たちは、ラングドック地方オード県の古い港町ナルボンヌ周辺で1か月以上待たねばならず、実際に出港したのは9月5日であった。かれら

の乗り込んだ船は9月9日にジブラルタルに接岸し、ヴァランはそこから飛行機を利用して9月13日にロンドンに到着した。かれはバラシャンに打電し、ロンドンでは熱烈な歓迎を受けていると知らせている¹⁶¹⁾。

その後、「フランス解放」後も、ヴァランは、ド・ラ・ロックとは二度と連絡を取ることはなかった。このヴァランのロンドンへの亡命は、ド・ゴール派に引き寄せられたPSFの有力メンバーの離反と同組織の分裂を象徴的に示すものであった。

1942年10月30日、ナチス親衛隊と在仏ドイツ治安警察の司令官カール・オーベルクは、PSFとそのすべての関連組織の解散を言い渡した¹⁶²⁾。しかし、『ル・プティ・ジュールナル』紙は発行されつづけた。

1942年11月8日、連合国軍はフランス領北アフリカを攻撃し、それを受けてドイツ軍はフランス全土を占領した。連合国軍が北アフリカ上陸作戦を開始した直後、ド・ラ・ロックはペタンに手紙を書き、かれのアラブ社会の知識と現地での経験が役立つであろうと示唆して、北アフリカに送られるよう要請した¹⁶³⁾。しかし、ペタンは、それよりも、ド・ラ・ロックがその部署にとどまり、これまで同様、引き続きフラ

¹⁶¹⁾ J. Nobécourt, *ibid.*, pp.833-838, 841.

¹⁶²⁾ このカール・オーベルクのPSF解散命令には「この禁止措置は完全に厳正に適用され、すべての違反は処罰の対象となろう。禁止措置は、党の組織のみならず、党の関連組織にも拡大して適用される・・・同時に、わたしは、ド・ラ・ロック中佐が占領地区には入り込み、滞在することを禁止する」と書かれ、ヴィシー政府の警察長官ルネ・ブスケによって通告された。Archives de la Fondation Nationale des Sciences Politiques, Fonds de La Rocque, LR34; M. Winock, *op. cit.*, p.19; 剣持前掲書, p.165.

¹⁶³⁾ ド・ラ・ロックが北アフリカに行くことを申し出た真の意図は、どこにあったのか。かれは息子のジルに、北アフリカへの出発計画はかれと交流のある連合国の機関が承認していると洩らして、「クラン網」の代表を続けるよりも、むしろ連合国軍のそばで協力するほうが重要だと考えていたのかもしれない。J. Nobécourt, *op. cit.*, p.855.

ンスにおける世論の動向を報告してくれるよう頼んだ。そのため、ド・ラ・ロックは、ペタンに力添えして、フランスを政治的、社会的混乱から保護することをかれのつとめと決めたが、事態の進行に困惑といらだちを隠せなかった。かれは、1942年11月9日の『ル・プティ・ジュルナル』紙に、連合軍の北アフリカ上陸を「侵略」と呼んだ対独協力的論説を執筆する一方で、PSFの集会では、占領軍と被占領国とのあいだでは協力は不可能であると言明し、かれの支持者たちが「戦士団保安隊 (SOL)」やフランス人民党のような対独協力組織には参加しないよう注意を促して、ドイツ占領軍にたいして2つの態度を使い分けた¹⁶⁴⁾。11月27日にドイツ軍政当局がヴィシー政府の休戦監視フランス軍の解体を命じたとき、ド・ラ・ロックはこの措置につよく抗議し、1942年12月9日の『ル・プティ・ジュルナル』紙に「軍隊万歳」と題した論説を発表して、「われわれの軍隊はよみがえるであろう。いかなる不名誉な偽装も、われわれの軍隊に取って代わることはできない¹⁶⁵⁾」と言明した。

けれども、既述のように、北アフリカを支配下におさめた連合軍が北アフリカ在住のユダヤ人の政治的権利を回復させたとき、ド・ラ・ロックはこの措置を厳しく批判した。かれが反独諜報活動にたいする疑いを刺激するようなことを避け、「クラン網」を詮索から守るために、あえて非道を装ったのではないかという側面があったとしても、しかし、かれのその批判が、1930年代以来のアルジェリアのユダヤ人社会にたいするかれの組織の敵意と一貫していたことは認めなければならない¹⁶⁶⁾。

『ル・プティ・ジュルナル』の運営委員会副委員長であったアンドレ・ポルティエの証

言¹⁶⁷⁾によれば、1943年1月、ド・ラ・ロックは北部地区にいく許可をえたが、境界線を越えようとしたとき、ド・ラ・ロックはドイツ憲兵隊によって容赦なく取り調べられ、旅行の目的を説明したにもかかわらず、かれの車は前後に2台のドイツ軍の車に挟まれて、強制的にパリに連行された。かれはグラン・タルメ通りの憲兵隊本部に直接連れていかれ、そこで微細な点にまでわたって尋問を受けた。尋問は長時間続き、その間、かれは、とりわけ、連合軍のために反ドイツ・スパイ機関を組織しているのではないかと執拗に問いただされた。かれはパリの住居にまで送っていかれたが、そこから出ないよう命令され、翌朝、憲兵隊本部でふたたび取調べを受けた。そして、午後には、前日同様、2台のドイツ軍の車に挟まれて、境界線にまで連れ戻された、という。

ド・ラ・ロックがドイツ占領軍によって反ドイツ・スパイ活動を疑われるようになっていたこの頃、かれは数度ペタンとの謁見の機会をえている。

このときのド・ラ・ロックとペタンとの最初の会見の日、1943年1月31日には、「戦士団保安隊 (SOL)」を吸収して、民兵団 (ミリス) を組織する法律が公布された。その前夜、ヴィシーの温泉ホテルで民兵団 (ミリス) 結成を宣言する会が開かれ、治安担当長官で民兵団 (ミリス) の指導者となるジョゼフ・ダルナンは、「フランスに国家社会主義的権威主義を確立する」ことを望んでいると挨拶した。首相のピエール・ラヴァルも出席して、民兵団 (ミリス) をかれの親衛隊として紹介した。ド・ラ・ロックはペタンに、かれがこの「戦士団保安隊 (SOL)」の民兵団 (ミリス) への改編に危惧の念を抱いていることを知らせ、2月3日には、ペタンに宛てた手紙のなかで、つぎのように書いている。「わたしは、この危惧の念を

¹⁶⁴⁾ Archives Nationales, 2AG 618, La Rocque à Pétain, 4 et 8 novembre 1942; 2AG 449, notes, 8 octobre 1942, 6 janvier, 25 février 1943.

¹⁶⁵⁾ Le Petit Journal, 9 décembre 1942.

¹⁶⁶⁾ S. Kennedy, *op. cit.*, p.249.

¹⁶⁷⁾ 『ル・プティ・ジュルナル』紙裁判での証言。

強調しなければならないというつらい義務をよく感じています。戦士団保安隊 (SOL) とその指導者ダルナン氏が公然ととっている態度は・・・民衆の一致した敵意的になっています。この敵意に加えて、戦士団保安隊 (SOL) が密告をおこなっているとひろく信じられています・・・あらたに民兵団 (ミリス) を結成することは、このように国内の対立をひどく悪化させ、ラヴァル首相のひどい不人気をいっそうつものらせかねず・・・悲しいことにわれわれの国の存立に重くのしかかっている重大な出来事が続いているなかで、このような組織の改革は国内を安定させるための最後のチャンスを決定的に阻止する、小さいけれども大事を引き起こす障害となることでしょう¹⁶⁸⁾。」

その後もド・ラ・ロックはペタンに報告を送りつづけ、さらに数度、ペタンに会うことができ、その都度、ラヴァルがおこなおうとしていた人事面の改革にたいして警戒を促す覚書きを用意した¹⁶⁹⁾。1943年3月7日が2人の最後の会談の日となったが、ド・ラ・ロックはのちに、1945年8月15日にド・ゴールに宛てて書いた手紙のなかで、このペタンとの最後の会見の模様をつぎのような文面で伝えている。「1943年3月7日、わたしは、ペタン元帥のまわりに立ちだかっていた多くの障害にもかかわらず、できるだけ無秩序から免れた首都の解放をめざして¹⁷⁰⁾、たがいにしめしあわせた共同努力によって、あなたを含めた連合軍と緊密に合意するという考えにかれの口頭での同意をようやく取り付けることができました。わたしは、この目的のために、確実に、そして継続的に連絡

をとるという方針をかれに受け入れさせました。その手筈はかれには知られていませんでしたが、それが規則的で有効なことをわたしは体験によって知っていました¹⁷¹⁾。」この会談のあと、ペタンは「わたしは毎週、定期的にド・ラ・ロック中佐と会おう。かれの意見は必要である。もっと早くかれの意見を聞かなかったことを後悔している。今後は、かれの忠告に耳を傾けることに決めた」と語ったという¹⁷²⁾。

しかし、この2日後の1943年3月9日、ド・ラ・ロックは、クレルモン・フェランの自宅で、ゲシュタポの南部地区指揮官、ナチス親衛隊大尉クルト・ガイスラーによって逮捕された。同時に、ゲシュタポは、パリのPSF本部を急襲して、大量の書類を押収し、ノエル・オッタヴィをはじめ、幹部152人を拘留した¹⁷³⁾。オッタヴィは、強制収容所に監禁中に死亡することになる。ジャック・ノベクールは、このド・ラ・ロックの逮捕とPSF幹部の一斉検挙をもたらしたのは、かつては火の十字架団やフランス社会党 (PSF) のメンバーであったりしたが、その後、ド・ラ・ロックに背いて、民兵団 (ミリス) にはいった者たちによる密告であったのではないかと考えている。

『ル・プティ・ジュールナル』紙の発行はその後も続けられたが、その政治的指導をおこなうものがなく、基本的に文学新聞となった。

9. 『今日のフランス、明日のフランス』

逮捕前の数か月間、対独協力への反対をしだ

¹⁶⁸⁾ J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.866-867.

¹⁶⁹⁾ J. Nobécourt, *ibid.*, pp.867-868.

¹⁷⁰⁾ この「“解放”後の国内の無秩序を避けるために」というド・ラ・ロックの言葉は、「もっとはっきりいえば、左翼のいっさいの蜂起と、ヴィシー体制の協力者にたいするいっさいの制裁措置を阻止するために」という意味だ、とロバート・サウシーは書いている。R. Soucy, *op. cit.*, p.123, (traduction française) *op. cit.*, p.188.

¹⁷¹⁾ この手紙は E. et G. de La Rocque, *La Rocque, tel qu'il était, op. cit.*, p.192 に載録されている。Ph. Machefer, *op. cit.*, p.53.

¹⁷²⁾ E. et G. de La Rocque, *ibid.*, p.192; J. Nobécourt, *ibid.*, p.873.

¹⁷³⁾ ゲシュタポによるド・ラ・ロックとPSA幹部の逮捕、PSAパリ本部の一斉捜査の詳細については、E. et G. de La Rocque, *ibid.*, pp.191-192; J. Nobécourt, *ibid.*, pp.875-884. 他に Ph. Machefer, *op. cit.*, p.53; 剣持前掲書, pp.181-182.

いに明白にしながらも、ド・ラ・ロックはベタンと国民革命の精神への忠誠の必要を一貫して強調した。1942年末にPSFの幹部だけを対象にして書かれた『今日のフランス、明日のフランス』と題したパンフレットのなかで、かれは、ベタンの精神的権威は揺るがしえないといい、「かれの精神的地位はあの聖人の絵を、迷信深い漁夫が、その聖人を侮辱したり、また、聖人に怒りを覚えたときには壁に背を向けたりすることがあっても、けっしてその絵を片付けてしまおうとはせず、かならず元の位置に戻して、助けを求めたり、ほめちぎったりする、あの聖人の絵を想い起こさせる¹⁷⁴⁾」と書いている。

ド・ラ・ロックの諜報活動は、たしかに、対独協力にたいするかれの強い反対の意志を示すものであった。しかし、1941年に書かれた著書『行動規律』のなかでは、ドイツ軍占領下という拘束された環境のなかにあったとはいえ、ド・ラ・ロックは「ヒトラーのファシズム体制の強力な生命力」を褒めていて¹⁷⁵⁾、ナチズム体制はド・ラ・ロックにとって完全に受け入れがたいものでもなかったようにおもわれる。さらに、限られた読者を相手に、おそらく反ドイツ諜報活動を始めたあとに書かれたとおもわれるパンフレット『今日のフランス、明日のフランス』のなかでも、ド・ラ・ロックは、ドイツ軍の行動を批判し、もはや対等な協力の機会は失われたと書いてはいるが、しかし、戦後に実現されるべきフランス社会の未来の姿を熟考して、かれは「貨幣の唯物論を実行している」アングロ・サクソン流民主主義を否定し、フランスは「ドイツから多くを学ばなければならない

い」と主張している。そして、ナチスは、すくなくとも、いくつかの点で、学ぶに値する社会的結合力を発達させ、「われわれは、社会の発展にかんして、ドイツで確立できたものと類似した、しかし、精神的な力を尊重し、家族の自立性を保護、奨励、強化する国家・公共の制度・民間組織を備えた体制をフランスにつくりあげなければならない¹⁷⁶⁾」と書いている。

しかし、ナチスが建設したものとPSFがフランスの将来について望んだものとのあいだには、あきらかな相違点がある、とド・ラ・ロックが考えていたことも疑いない。『今日のフランス、明日のフランス』のなかで、かれは、ボルシェヴィズムに近似し、キリスト教文明の価値観とは相容れない、ナチズムの「汎神論的」で物質主義的な世界観に強い懸念を表明している。ド・ラ・ロックが心に描く将来のフランスのヴィジョンは、それとはちがって、軍隊的、農村的生活と家族に基礎を置いたキリスト教的価値観を尊重するエリートによって指導された体制を希求するフランスであった¹⁷⁷⁾。

また、1942年12月16日の『ル・プティ・ジュルナル』紙で、ド・ラ・ロックはフランコ將軍の権威主義を賞賛し、さらに、「ポルトガルでサラザールが推進している力強い伝統主義に、異論を唱えるものはいない。したがって、われわれのうちの誰も、民族的起源とキリスト教文明においてわれわれにきわめて近いこの両国が選択した進路に類似した方針にもとづいて、フランスの進むべき道を示すことに恐れを抱くものはいない」と主張している¹⁷⁸⁾。このような主張から判断するかぎり、ド・ラ・ロックがフランス国民に提案しようとしていたのは、

¹⁷⁴⁾ Archives Nationales, 451AP 102, François de La Rocque, *France d'aujourd'hui, France de demain*, 1 janvier 1943. Michel Dobry éd., *Le mythe de l'allergie française au fascisme*, Albin Michel, Paris, 2003, pp.416-425 に、このパンフレットの抜粋が掲載されている。

¹⁷⁵⁾ F. de La Rocque, *Disciplines d'action*, op. cit., pp.89, 118; R. Soucy, op. cit., pp.119-120, (traduction française) op. cit., pp.184-185.

¹⁷⁶⁾ F. de La Rocque, *France d'aujourd'hui, France de demain*, op. cit., pp.5-6.

¹⁷⁷⁾ F. de La Rocque, *ibid.*, pp.5-6, 16-18, 25.

¹⁷⁸⁾ *Le Petit Journal*, 16 décembre 1942. 1942年12月21-22日の『ル・プティ・ジュルナル』紙においても、ド・ラ・ロックはふたたびポルトガルの例を話題に上げている。

社会秩序の確立に努力する家父長主義的な心の持ち主であるエリートによって指導された、権威主義的ではあるが、しかし、政党や政治団体の複数制を認めた「多元主義的な」国家の建設を要求する、国民革命のひとつのヴァリエーションであったということができよう¹⁷⁹⁾。

10. さまざまな道

PSFのメンバーは、そのあるものは対独協力の道を選び、あるものはレジスタンス・グループに参加し、また、あるものは政治運動を断念して、その結果、ヴィシー体制とドイツ軍占領の下、ド・ラ・ロックの組織はしだいに分裂していった。

対独協力派の組織に加わったメンバーは多かった。たとえば、ロワレ県では、1941年12月にマルセル・デアによって結成された「国家人民連合 Rassemblement National Populaire (RNP)」に数人の元PSFメンバーが参加した。また、ドリオのフランス人民党には戦前から多数の元火の十字架団員、フランス社会党 (PSF) 員が入党していたが、かれらのうちの若干はドイツ軍占領下でもドリオを支持しつづけ、ドリオ支持から対独協力に走った¹⁸⁰⁾。

PSFを棄て、ヴィシー体制に緊密に協力したものもいた。フランス社会党 (PSF) 元ヴィエンヌ県支部委員長でポワティエ大学法学部教授であったフェリックス・オリヴィエ・マルタンは、1943年には、ヴィシー政府の青年問題担当事務総長になった¹⁸¹⁾。この点でもっとも目

立った人物はポール・クレセルであり、かれは1942 - 1944年に情報省の宣伝局長としてヴィシー政府に仕えた。

クレセルは、既述のように、休戦後まもなくフランス社会党 (PSF) を離党し、ヴィシー政権内に職をえたのちは、ラヴァルに従順な態度を示したけれども、しかし、かれの中心的な宣伝テーマは、興味深いことに、かなりの程度、PSFの教義と共鳴するものであった。かれは対独協力を主張することにはあまり乗り気ではなかったが、その演説の特徴は激しい反共産主義であり、フランス国民はヴィシー体制に忠誠でありつづけ、そうすることによって内戦を避けるべきだと主張した。そのスピーチには、ド・ラ・ロックのそれを想起させるものがあった¹⁸²⁾。しかし、結局、ドイツ軍政当局は当局の関心へのクレセルの共感が不十分と考えるにいたり、かれは1944年1月に対独協力の強硬路線の支持者フィリップ・アンリオにポストを奪われたが、その埋め合わせに、モナコのヴィシー政府公使に任命された。

これらとは反対の極に、PSFの指令に反して、国内レジスタンスの組織に引きつけられたものたちもいた。そのなかには、左翼と緊密に協力するものさえいた。その右翼から左翼への移行の動きは複雑であったけれども、一例をあげれば、1939年3月、ニースでの下院議員補欠選挙でフランス社会党 (PSF) の支持を受けて当選したジャック・ブーナンは、1941年にPSFとの関係を絶ちはじめ、同年末、南部地区で共産党が指導する「国民戦線」の執行委員会に加わった。しかし、「国民戦線」からの接触があるまえに、かれは最初はド・ゴール派の「自由フランス」に合流しようとしていたのであり、結局、かれが「国民戦線」を選んだのは、おそらく、イデオロギック的転向の結果というよりは、むしろ、「国民戦線」をドイツ占領

¹⁷⁹⁾ S. Kennedy, *op. cit.*, p.250.

¹⁸⁰⁾ Bertram Gordon, *Collaborationism in France during the Second World War*, Cornell University Press, Ithaca and London, 1980, pp.122, 199. また、PSFの1報告は、1935年に火の十字架団を退団したポール・ショビーズが、対独協力派の民兵団 (ミリス) にはいつて活動していることを示唆している。Archives Nationales, 451AP 126, Nouveaux cadres de la Révolution Nationale en Oise-Sud, n. d.

¹⁸¹⁾ R. O. Paxton, *La France de Vichy 1940-1944*, *op. cit.*, p.291, 渡辺・剣持訳, p.240.

¹⁸²⁾ S. Kennedy, *op. cit.*, pp.251-252.

軍に抵抗するためのもっとも有力な組織とみなしたからであったろう¹⁸³⁾。

ブーナンは、その回想録¹⁸⁴⁾のなかでは、フランス社会党 (PSF) に所属したその過去の経歴を消し去ろうとしているが、かれが1939年3月の下院議員補欠選挙で当選したあと、フランス社会党 (PSF) に入党したのは否定しがたい事実であった¹⁸⁵⁾。

保守派ナショナリズムの傾向のレジスタンス運動にいくべき道をみいだした元PSF支持者たちの数は、これより多かったようにおもわれる。たとえば、1930年代にフランス社会党 (PSF) ロワール・アンフェリウール県支部の指導的人物ルイ・オーディベール将軍は、ナショナリズム志向のレジスタンス組織「秘密軍」の指導者となったが、1943年1月、ナントで逮捕され、1944年3月、家族全員とともにラヴェンスブルックの強制収容所に送られた。かれの妻は生き延びることができなかったが、戦後、オーディベールはフランスに戻り、国民議会議員に選ばれた。かれは右翼の有力政治家としてとどまったが、ド・ラ・ロックがヴィシー体制下であいまいな姿勢をとったことを非難した¹⁸⁶⁾。

また、ド・ラ・ロックのド・ゴール派批判にもかかわらず、PSFのメンバーのままで、ド・

ゴール派の「自由フランス」と同調した人物もいた。フランス敗戦後もPSFで重要な役割を演じていたシャルル・ヴァランは、既述のように、1942年夏に姿を隠し、ロンドンに逃亡してド・ゴールを支持し、ド・ラ・ロックは、親しい協力者の亡命に大きなショックを受け、人間として裏切られたと感じた。

元フランス社会党 (PSF) 政治局長でヴァランの親しい友人であったエドモン・バラシャンは、1941年9月から1942年春まで、かれの母の2番目の夫でマドリッドでフランス大使をしていたフランソワ・ピエトリの許に身を寄せていたが、そこからド・ラ・ロックに長文の意見書を送り、PSFのフランス国内での活動には賛成したが、対外政策では異論を唱えた。ヴァランがロンドンに亡命したときには、かれはヴィシーに残ったが、しかし、その後、露骨にPSFとは距離を置き¹⁸⁷⁾、数か月後にはマドリッドに戻り、そこからリスボン経由でイギリスに渡った。

PSFに忠実にとどまったものたちは、どのような状態にあったのか。いくつかの地方支部は、1940年6月の休戦後、復員兵士たちが戻ってきたとき、活気を取り戻した。メルシオール・ボネの観察によれば、その後、パリでは、ナチスと対独協力派への反感のため、PSFは活動を活発化させ¹⁸⁸⁾、また、エヌ県知事とドイツ占領軍地区司令部とのあいだで交わされた情報

¹⁸³⁾ J. Nobécourt, *op. cit.*, p.850; S. Kennedy, *ibid.*, p.252.

¹⁸⁴⁾ Jacques Bounin, *Beaucoup d'imprudences*, Stock, Paris, 1974.

¹⁸⁵⁾ 竹岡前掲書, pp.858, 893; Philippe Machefer, *Le Parti social français*, in René Rémond et Janine Bourdin éd., *La France et les Français en 1938-1939*, Presses de la Fondation Nationale des Sciences Politiques, Paris, 1977, p.323; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.646, 850, 1062.

¹⁸⁶⁾ J. Nobécourt, *ibid.*, p.884; Jean-Paul Thomas, *Parti Social Français et le monde militaire*, in Olivier Forcade, Eric Duhamel et Philippe Vial éd., *Militaires en République 1870-1962. Les officiers, le pouvoir et la vie publique en France*, Publications de la Sorbonne, Paris, 1999, pp.427-429; Robert Gildea, *Marianne in Chains. In Search of the German Occupation of France*, Macmillan, London, 2002, p.358. ロバート・ギルディーは、オーディベールが送られたのは、ランスブルックではなくて、ブッヘンヴァルトであったのではないかと書いている。

¹⁸⁷⁾ エドモン・バラシャンは、1942年1月18日、マドリッドからド・ラ・ロックに宛てて書いた手紙のなかで、「連合国軍が勝利した場合、共産党とド・ゴール派とのあいだで、ベタン元帥の支持基盤を確保し、その存命を図るためには、どうしても国民政が必要になります。連合国軍が勝利したとき、必要な人物はポール・レノーです。かれに頼らなければなりません」とのべている。それは、1940年6月、ボルドーで、徹底抗戦か休戦かをめぐって、激論を交わしたレノーとベタンの激しい対立を忘れた奇妙な主張であった。Archives de la Fondation Nationale des Sciences Politiques, dossier «Barrachain, correspondance 18 janvier 1942, Lettre de Madrid au colonel»; J. Nobécourt, *op. cit.*, p.849; 剣持前掲書, pp.175-176.

¹⁸⁸⁾ Ch. Melchior-Bonnet, *op. cit.*, pp.236-239.

を信じるならば、ドイツ軍占領地区では、政治組織にたいする禁圧措置にもかかわらず、PSFのメンバーたちはきわめて活動的であった¹⁸⁹⁾。非占領地区では、PSFが弾圧されるまで、公然たる活動が続けられた。

しかしながら、全体的な傾向は衰退的であった。1941年10月に、ペタン側近のひとりアメリカ大使に、PSFのメンバーは総計で35万人であり、戦前の最大値のおおよそ3分の1であると語っている。これでもなおかなりの数であったが、しかし、それはPSFの勢力の凋落をはっきりと示す数字であった。『ル・プティ・ジュルナル』紙の発行部数もしだいに減少し、ドイツ軍占領末期には6万7,000部にまで落ちている¹⁹⁰⁾。

PSFのメンバーでありつづけたものたちのなかには、とりわけドイツ軍占領末期に、ヴィシー体制に同調できず、それに刃向かう行動をとったものもいた。リヨン医学薬学部長アンリ・エルマンの証言によれば、かつてフランス社会党 (PSF) の慈善バザー等の社会事業部門を統括し、ヴィシー体制下ではド・ラ・ロックの諜報組織「クラン網」のなかで重要な役割をになったアントワネット・ド・プレヴァルは、「愛国奉仕団 (ADP)」のメンバーとして活動しながら、刑務所に収監された対独レジスタンス運動員（「マキザール」）を支援し、その逃亡計画を手助けした¹⁹¹⁾。

また、スタニスラス・ドヴォーはペタンの諮

¹⁸⁹⁾ *Archives départementales de l'Aisne*, 1M 19, feldkommandant à préfet, 8 mai 1941; dépositions de Carette, Susini et Flabat, 14 mai 1941; commissaire spécial (Laon), 15 mai 1941; préfet à feldkommandantur, 19 mai 1941; S. Kennedy, *op. cit.*, p.253.

¹⁹⁰⁾ *Le Petit Journal, directeur La Rocque acquitté en Cour de justice, op. cit.*; Ph. Machefer, Sur quelques aspects de l'activité du colonel de La Rocque et du «Progrès social français», *op. cit.*, p.52; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.770-771; *United States National Archives*, RG 59 851, 00 (Reports on France) 2385, report by Leahy, 3 October 1941; S. Kennedy, *op. cit.*, p.254.

¹⁹¹⁾ *Archives Nationales*, 451AP 102, lettre de Henri Hermann, 5 octobre 1946.

問機関「国民評議会」(1941年1月に設置)のメンバーを続け、1943年7月に辞任したが、その後もド・ラ・ロックの忠実な友としてとどまった。フェルナン・ロップはリオン裁判で証言するほどまでヴィシー体制に協力したが、やがてド・ラ・ロックの周辺から姿を消し、その後はレジスタンスを支持した、とのちにかれは主張している¹⁹²⁾。イバルネギャレーはどうかといえば、1940年9月に政府から職を解かれたあと、バス・ピレネのかれが所有する地所に引退し、そこでユアール・シゼの町長をつとめるかたわら、亡命者とレジスタンス志願者がスペインに渡るのを助けた疑いで1943年9月に逮捕され、ドイツの強制収容所に送られた¹⁹³⁾。

しかしながら、戦後、これらの元フランス社会党 (PSF) 下院議員たちのすべては、ヴィシー政府を支持したとして罰せられ、期間はまちまちであったが、一定期間、市民権を失った。

11. 強制収容所で

1943年3月9日のド・ラ・ロックとPSF幹部たちの逮捕後、ペタンのもとには、PSF支部の委員長、PSFと「愛国奉仕団 (ADP)」の活動家たち、ド・ラ・ロックのシンパたちからの、国家元首の介入を切願した多量の電報と手紙が届けられた。3月18日には、数人のPSF幹部が、ド・ラ・ロックらの釈放を願ってペタンと会った。ペタンは外見上は熱心にかれらの懇願に耳を傾け、ドイツ占領軍に提出できる証拠書類を要求したが、しかし、結局、かれらの努力は実を結ばなかった¹⁹⁴⁾。

¹⁹²⁾ J. Nobécourt, *op. cit.*, p.851; *Dictionnaire des parlementaires français*, III, pp.327, 342; *Journal officiel, Lois et décrets*, 7 octobre 1945.

¹⁹³⁾ *Archives Nationales*, 3W 346, préfecture de police, cabinet de M. Mathiew, 2 octobre 1945; Miranda Pollard, *Reign of Virtue. Mobilizing Gender in Vichy France*, University of Chicago Press, Chicago, 1998, pp.103-105, 224 note (24).

¹⁹⁴⁾ *Archives Nationales*, 451AP 123, Les dirigeants du

ド・ラ・ロック逮捕後、南部地区のPSFの委員長代行には、アントワネット・ド・プレヴァルの支持を受けたクレルモン・フェラン医学校教授のドデルが就任した。『ル・プティ・ジュルナル』紙は、その運営委員9人のうち7人が逮捕されたにもかかわらず、1944年8月まで発行されつづけ、とりわけ「愛国奉仕団(ADP)」の活動をくわしく報道した。

ド・ラ・ロックとともに逮捕されたかれの同僚たちのうち、多数のものが、銃殺されたり強制収容所に監禁中に死亡したりして、非業の死を遂げた¹⁹⁵⁾。そのなかには、PSF副委員長のノエル・オッタヴィと多くの地方のリーダーや幹部たちがいた。

ド・ラ・ロック自身は、数か月間、ムーラン、フレーヌ、シェルシュ・ミディなど、フランス各地の刑務所に監禁されたあと、1943年8月31日、ミシェル・クレマンソー(元首相ジョルジュ・クレマンソーの息子)などの政治家たちといっしょに、ボヘミアのアイゼンベルクの古城に設営されたドイツ捕虜収容所に送られた。この収容所は95人の抑留者が75人のナチス親衛隊員、17人の下士官と獐猛な番犬によって監視され、民間人は1キロメートル以内に近づくことは許されていない¹⁹⁶⁾。食料は、しばしば、1日800キロカロリーに制限され(それは囚人に強制労働が課せられた収容所の食事制限1300キロカロリーより悪い飢餓的な食料管理規則であった¹⁹⁷⁾)、収容所の厳しい

監禁生活はド・ラ・ロックの健康を損わせ、北アフリカと第1次世界大戦時の軍役中に受けた傷の後遺症がかれを苦しめた。

1944年1月には、ド・ラ・ロックとクレマンソーは、アイゼンベルクからチロルのイッター収容所に移された。そこには第2次世界大戦開戦時と敗戦時の2人のフランス軍総司令官ガムラン将軍とヴェガン将軍、かつて1934年2月6日事件当日ド・ラ・ロックの「敵」であった元首相ダラディエや元首相ポール・レノー、前大統領アルベール・ルブラン、元労働総同盟(CGT)委員長レオン・ジュオー、ド・ゴールの妹アニエス・カイヨー夫人、テニスのチャンピオンで、元火の十字架団団員であり、一時、ヴィシー政府のスポーツ・体育担当の統括委員であったジャン・ボロトラらの著名な人物が収監されていた¹⁹⁸⁾。

ところが、ド・ラ・ロックがイッター収容所に到着するや、アイゼンベルク収容所でのかれの行動が火種となって、在監者たちのあいだで、突然、激しい口論が噴出した。ド・ラ・ロックとクレマンソーがイッター収容所に送られてきた1月9日午後、クレマンソーは、ド・ラ・ロックがアイゼンベルク収容所でナチス親衛隊長官ヒムラーに宛てて手紙を書き、もしかかれが釈放されたならば、共産主義者とたたかうために、PSAのメンバー300万人がドイツに協力すると申し出たといつて、ド・ラ・ロックを非難したのである。クレマンソーの非難はすぐに収容所内に広まり、ド・ラ・ロックはこの非難に憤然として、それは囚人の待遇改善をヒムラーに訴えた手紙であり、クレマンソーのいうような「申し出」は断じてしていないと反論した。クレマンソーは問題の手紙を読んでいない

Progrès Social Français, n. d.; 3W 290, minute de la rencontre entre Pétain et PSF, 18 mars 1943; Le Tanneur à Pétain, 21 mars 1943.

¹⁹⁵⁾ J. Nobécourt, *op. cit.*, p.817は、完全ではないが、これらの犠牲者の氏名をリストアップしている。

¹⁹⁶⁾ J. Nobécourt, *ibid.*, pp.890-891; 剣持前掲書, pp.186-187.

¹⁹⁷⁾ 食事は野菜と草を混ぜた一皿だけであり、夕食には凝乳チーズ、ときには小さな立方体の肉の固まりが出たが、パンは1日200グラムに制限された。このような食事管理の4か月間の生活を経て、1944年1月にイッター収容所に送られてきたド・ラ・ロックをみたヴェガンは、「痩せ衰えて見違えるほどであった」と語っている。そのとき、ド・ラ・ロックの体重は42キロにすぎなかった。J. Nobécourt, *ibid.*,

pp.894-895; 剣持前掲書, p.187.

¹⁹⁸⁾ J. Nobécourt, *ibid.*, pp.890-911; Philip Bankwitz, *Maxim Weygand and Civil-Military Relations in Modern France*, Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1967, pp.354-355; André François-Poncet, *Carnets d'un captif*, Arthème Fayard, Paris, 1952, pp.13-81.

ことを認めたが、それでもなお、ほかにも手紙が存在していることを示唆して、ド・ラ・ロックを非難しつづけた。ド・ラ・ロックは、誓ってそのような手紙は存在しないと断言した。ダラディエが、「ド・ラ・ロック氏がヒムラーに書いた手紙をわたしは読んだが、そこにはそのような取引を申し出た形跡はいっさいない」といい、「非難はまったく不当であり、われわれのあいだで分裂が起こるのを期待しているドイツ人看守たちのまえで、これ以上言い争うのは見苦しい」と主張したことによって、ようやく口論に終止符が打たれた¹⁹⁹⁾。

1944年8月末にはフランス本国はすでに「解放」されたが、まだイッター収容所に監禁されていたド・ラ・ロックは、1944年11月、病氣治療のため、インスブルックの病院に入院している。その後、収容所と病院を往復する状態が続き、1945年4月23日、治療が完全でないまま病院から収容所に連れ戻され、5月5日、その前夜にいったん放棄された収容所を取り戻そうとしたナチス親衛隊との戦闘に参加している。このとき、病的な健康状態にあったにもかかわらず、ド・ラ・ロックはボロトラ、クレマンソー、レノーらとともに武器を取り、ナチス親衛隊と戦ったのである。翌日、かれらはアメリカ落下傘部隊によって最終的に解放された²⁰⁰⁾。

12. PSFの歴史の終わり

フランス各地の監獄、ついでアイゼンベルクとイッターの強制収容所での2年2か月の監禁生活ののち、1945年5月8日、ド・ラ・ロッ

クはフランスに帰国した。しかし、パリ北方のブルジェ空港に降り立ったとたん、かれは突如警官によって拘束され、「行政収容」と呼ばれる制度によって、ヴェルサイユのバラック兵舎に連行され、機動憲兵隊の厳重な監視下に拘禁された²⁰¹⁾。

ド・ラ・ロックの帰国は、かれの身邊に張りめぐらされた厳重な監視の網のなかに、みずから飛び込んだようなものであった。ド・ラ・ロック自身はまだなんら訴追の対象になってはいなかったが、しかし、『ル・プティ・ジュルナル』紙は、1944年10月に臨時政府によって公布された新聞にかんする政令によって発行が停止され、その不動産は「敵の財産」として押収されていた。10月6日には、同じ政令にもとづいて、情報相は、検事局に、「対独協力」の容疑で『ル・プティ・ジュルナル』紙にたいする予審を開始するよう要求した。1945年3月2日には、立憲議会で、共産党を代表してジャック・デュクロが、PSFの非合法化を要求し、3月6日には、パリ解放委員会(CPL)が内相に「いかなるかたちであれ、フランス社会党(PSF)の再建を禁止し、かつてド・ラ・ロック中佐によって創設されたこの運動の指導者たちがふたたび害を及ぼすことができないようにする」ことを要求したモーリス・ド・バラルの提案を満場一致で採択していた²⁰²⁾。3月9日には、臨時政府の閣議が、情報相の使用した言葉通りに引用するならば、「PSFは共和国の法によって、そして、パリ控訴院(高等裁判所)と破棄院(最高裁判所)が追認した司法権

²⁰¹⁾ 剣持前掲書, pp.194-195.

²⁰²⁾ モーリス・ド・バラルは火の十字架団創設時のメンバーで、初代委員長モーリス・ダルトワが脱退したとき行動をともにした人物である。かれは共産党が指導権を握っていたパリ解放委員会(CPL)では穏健派を代表していたが、かれの提案は新しい同盟者、共産党に友情のあかしを示すことによって、同党とのかつての争いを清算しようとしたものであったとおもわれる。J. Nobécourt, *op. cit.*, p.930; 剣持前掲書, p.200.

¹⁹⁹⁾ Edouard Daladier, *Journal de captivité 1940-1945*, Calmann-Lévy, Paris, 1991, pp.250-255, 267; Paul Reynaud, *Carnets de captivité 1941-1945*, Arthème Fayard, Paris, 1997, pp.309-312; Augusta Léon-Jouhaux, *Prison pour hommes d'état*, Denoël Gonthier, Paris, 1973, pp.69-75; J. Nobécourt, *ibid.*, pp.906-908; 剣持前掲書, pp.189-190.

²⁰⁰⁾ P. Raynaud, *ibid.*, p.361; J. Nobécourt, *ibid.*, p.911.

にもとづく決定によって解散させられ、解散させられたままである²⁰³⁾」と決議していた。

また、法務省の刑事事件部長は、バリとリオンの検事長に「ド・ラ・ロックを起訴できるかどうか」を尋ねていた。しかし、2人の検事長の答は、ともに否定的であった²⁰⁴⁾。4月末には、法相がリオンの検事長に「ド・ラ・ロック中佐を起訴するよう」厳しく命令したが、検事長は、その返書の余白に、「告訴箇条を明確にするべきでしょう」という語句を書き込んで、困惑を隠さなかった²⁰⁵⁾。結局、法相は、国家の「対外的」安全にたいする侵害、つまり「対独協力」の罪で起訴してもならん利益にはならないと結論したが、しかし、ヴィシー政府の公職を引き受けた罪で、破棄院民事部に提訴すべき「非国民罪」で起訴するか、あるいは、1940年7月10日以前の活動にかんして有罪の新しい証拠が出てくるならば、国家の「対内的」安全にたいする侵害の罪で起訴するという余地を残していた。他方で、社会党員の内相アドリアン・ティクシエがド・ラ・ロックを起訴することに執念を燃やしていた²⁰⁶⁾。

「行政収容」という制度は、1939年11月18日と29日に公布された政令によって定められ、当時非合法化されたフランス共産党²⁰⁷⁾に最初

に適用されたものであったが、ヴィシー政権下では、この政令は、政府の反対者とみなされたすべての人物、とりわけレジスタンスの疑いがかかる政治家たちを取り締まるための法律になり、この制度が乱用された。そのため、戦後、この第3共和制に起源をもつ法律の廃止は合法性への回帰の試金石となり、内相ティクシエも「行政収容」をまったく例外的な措置とするように厳重な指令を出していたのであったが、ド・ラ・ロックのケースは、このかれ自身の決めた原則に背いた措置であった²⁰⁸⁾。

1945年5月8日の午後にド・ラ・ロックを乗せた飛行機がブルジェ空港に着くのを知ったティクシエは、国家警察総局長に宛てた通達のなかで、「ドイツから帰国し、高等法院や特別法廷に告訴されるかもしれない人物の“行政収容”や居住地拘束をおこなう理由があるかどうかを決定する²⁰⁹⁾」権限をかれ自身もっていることを明記した。さらに、5月8日午前中に、ティクシエは、セヌ・エ・オワーズ県知事に電話して、「ド・ラ・ロックを拘禁しなければならないので、必要な措置をとるように」要請した。このような「理由のない」火急の命令にどうしていいかわからず、「この措置の完全に違法な性格」に不安を覚えた知事が追加の説明を要求したのにたいして、ティクシエは「かれをヴェルサイユの兵舎にこっそりと監禁して、後日の指示を待て」とだけ返事したという²¹⁰⁾。

最初、この監禁は共産党の攻撃からド・ラ・ロック自身の安全を守るためであると説明されたが、しかし、ド・ラ・ロックは、かれがPSFを再建するのを妨害するために拘留されたのだと確信し、監禁はかれの貧弱な健康をいっそう

²⁰³⁾ Archives Nationales, F1^a 3238 IC, 7. この情報相の声明あるいは閣議決定は、実際には、一連の事実誤認に立脚していた。1945年5月にドイツの強制収容所から帰国したド・ラ・ロックは、同年7月、この閣議決定について、「政府のコミュニケは、どうみても筋が通らない。いかなる“司法権にもとづく決定”もPSFの解散を許容したことはなく、ましてやそれに言及したことはない・・・この種のいかなる政令も、どの政府によっても公布されたことはない」と指摘している。Archives Nationales, F⁷ 15287, dossier no.21, C. XV, La Rocque, note juridique au sujet du communiqué du gouvernement du 9 mars 1945 et de la non-dissolution du PSF, jointe au rapport des Renseignements généraux du 17 mai 1945.

²⁰⁴⁾ Archives Nationales, 8 BL 1384.

²⁰⁵⁾ Ibid.

²⁰⁶⁾ J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.912-914; 剣持前掲書, pp.194-195.

²⁰⁷⁾ 竹岡前掲書, pp.556-557.

²⁰⁸⁾ J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.915-917; 剣持前掲書, pp.195, 245.

²⁰⁹⁾ Archives Nationales, F1^a 3253, Tixier à Pélabon (directeur général de la Sûreté nationale).

²¹⁰⁾ Archives de la Fondation Nationale des Sciences Politiques, rencontre Gilles de La Rocque avec le préfet Léonard le 21 avril 1983.

悪化させると訴えた²¹¹⁾。

1939 - 1940年の「おかしな戦争」とその後のドイツ軍占領の期間のPSF(フランス社会党、ついで「フランス社会進歩」)の行動を決定したのは、1930年代にフランソワ・ド・ラ・ロックの指導下で成長していった組織のフランス再生のヴィジョンを実現しようとする野心であった。1940年6月のフランス敗北のあと、ド・ラ・ロックとPSFのメンバーは、ペタンと国民革命の思想への忠誠を宣言し、最後にはドイツ占領軍と対立したが、一貫して、最後まで、ペタンのめざした国民革命の明確な支持者として行動した。ド・ラ・ロックとPSFのリーダーたちは、ペタンに忠誠を示すことによって、いつの日か、かれらが政権を握る日がくるのを夢見ていた。

ド・ラ・ロックとかれに忠実な支持者たちは、ペタンとペタンの名において統治する政府とを区別しようとしたが、しかし、ヴィシー政府と完全に手を切ることはなかった。かれらがヴィシー政府に疑念を抱くことはあっても、最後まで国家元首を支持し、国内秩序の維持の必要を強調し、ド・ゴール派と国内レジスタンスの組織を支持することはなかった。かれらはひそかに連合国軍を助ける諜報活動を始めたが、レジスタンスに向かおうとするかれらの行動は、ドイツ占領軍の強大な力によって押しつぶされ、多数の殉教者を生んだが、それにもかかわらず、ヴィシー政府にたいしてPSFが取りつづけた姿勢のために、「フランス解放」後、かれらは新しい政府権力によって糾弾されたのである。

ド・ラ・ロックは、ヴェルサイユのバラック兵舎に拘禁されながらも、PSFの後継組織設

立の準備に専心した。かれはPSF復活を希望していたけれども、多数の旧PSFメンバーは、かれの同意をえて、1945年7月に「フランス和解社会共和党Parti Républicain et Social de la Réconciliation Française」(通称「フランス和解RF」)の名前で知られることになる。以下、略称RFを使用する)を結成し、1945年9月4日に、パリのヴァーグラム会館で、その第1回大会を開催した²¹²⁾。大会では、ド・ラ・ロックの書いた活動方針演説の草稿が元PSF幹部ジョゼフ・ルヴェによって読み上げられた。警察報告によれば、新党の印象は火の十字架団とフランス社会党(PSF)のそれに酷似していたという²¹³⁾が、RFは、みずからを「国のために惜しまず身を捧げ、なにかをなそうと欲する人びとのための理想」によって動かされる党と呼び、その第1の目的は共産主義の打倒であるとしていた。ド・ラ・ロックは、新党の県および郡の委員会の構成について指示をあたえ、さらに、支持者たちにたいして、性急な新憲法の制定は1875年の旧憲法を維持するより危険だと考えられるので、1946年5月に予定されている国民投票では反対票を投じるよう勧告した²¹⁴⁾。かれの死の5日前のことであった。

ド・ラ・ロックは、長期の監獄と強制収容所での生活の結果、極端に体重が減少し、そのために破壊された瘢痕組織の手術を必要としていた。また、座骨神経痛にも苦しんでいた。かれは「行政収容」によって監禁状態に置かれていることを不服として、セヌ・エ・オワーズ県知事とド・ゴールにたいして釈放を訴え、政治活動を一時控えることを約束した。ド・ゴールから返事はなかったが、知事はド・ラ・ロック

²¹²⁾ Ph. Machefer, Sur quelques aspects de l'activité du colonel de La Rocque et du « Progrès social français », op. cit., pp.53-54; J. Nobécourt, op. cit., pp.934-935; 剣持前掲書, pp.201-202.

²¹³⁾ Archives Nationales, F⁷ 15284, rapport, 25 janvier 1946.

²¹⁴⁾ Ph. Machefer, Sur quelques aspects de l'activité du colonel de La Rocque et du « Progrès social français », op. cit., p.54; J. Nobécourt, op. cit., p.935.

²¹¹⁾ Herbert Lottman, *The People's Anger. Justice and Revenge in Post-Liberation France*, Hutchinson, London, 1986, pp.188-193.

の要求を取り上げ、内相アドリアン・ティクシエにド・ラ・ロックの健康状態にかんする懸念を表明した。ティクシエは、法務省がド・ラ・ロックを裁判にかけるかどうか決定するまでかれを拘禁しておこうとしたが、しかし、1945年11月、県の行政収容検査委員会がド・ラ・ロックを訪問して、全員一致で、かれを拘留しておくのは不当であり、内務省にかれの釈放を提言する正当な理由があると結論した²¹⁵⁾。

内務省の決定によって、ド・ラ・ロックは1945年12月にヴェルサイユのバラック兵舎から出ることができた。けれども、まだ釈放されたわけではなく、パリの周囲200キロメートルの範囲内に滞在することを禁じられた。しかし、医者 の要請によって、ド・ラ・ロックは、元PSF幹部で新党RFの副委員長になっていたアンドレ・ポルティエのパリ郊外クロワシーの住居に居住することが許された。その後は、1946年におこなった胃の手術を含めて医師の治療を受けつづけたが、容体はしだいに悪化し、3か月後、食道に広がった潰瘍のため、パリに急送され、1946年4月27日、4時間に及ぶ手術を受けたが、強制収容所生活と帰国後の監禁生活によって衰弱していた体は大手術に耐えられず、翌4月28日朝、息を引き取った²¹⁶⁾。

ド・ラ・ロックがヴェルサイユの兵舎の屋根裏部屋に収容されて半月後、かれは、セヌ・エ・オワーズ県知事に、かれがおこなったレジスタンス活動を証明する書類を取りに行くために帰宅し、また、連合国軍とかれとのあいだを仲介した人物とも連絡をとりたいと要求した²¹⁷⁾。

²¹⁵⁾ E. et G. de La Rocque, *op. cit.*; *Le Petit Journal, directeur La Rocque acquitté en Cour de justice, op. cit.*; Ph. Machefer, *ibid.*, p.54.

²¹⁶⁾ H. Lottman, *op. cit.*, pp.188-193; Ph. Machefer, *ibid.*, p.54; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.912-927; S. Kennedy, *op. cit.*, pp.259-260.

²¹⁷⁾ *Archives Nationales*, F1^a A 3239, 28 mai 1945, lettre de protestation de La Rocque au préfet de Seine-et-Oise.

まもなくイギリスの政府機関、英仏連絡局から証明書が届いた。それは「ド・ラ・ロック中佐が1942年6月1日から（ドイツ軍によってかれが逮捕された）1943年2月まで「クラン網」のリーダーであり、イギリス軍情報部に、当該期間のあいだ定期的に届けられた政治的、軍事的情報を提供したことを証明する²¹⁸⁾」という、ド・ラ・ロックの申し立てが真実であることを認証する証明書であった。ド・ラ・ロックと連合国軍とを仲介したジョルジュ・シャロドー大佐もみつき、かれは警察に出頭し、「1940年7月以降、わたしはイギリス軍情報部に属する「アリバイ網」の責任者でした。1942年5月に、マドリッドで、わたしは、情報網をつくることを承諾したド・ラ・ロック中佐と接触できることを知らされました。数度の話し合いののち、1942年7月に「クラン網」がつくられ、ド・ラ・ロック中佐がこの組織の責任者になりました²¹⁹⁾」とのべて、ド・ラ・ロックの申し立ての真実を証言した。

警察庁は、英仏連絡局の証明書を信用した。また、警察庁長官は、レジスタンス組織とその活動の実態調査を担当する公的認証機関、「調査研究総局 Direction générale des études et recherches (DGER)」が「クラン網」を認定したと信じていた。しかし、そう信じたのはまちがいであり、まったくその事実はなかった。

実際には、6月14日、ド・ラ・ロックはこの「調査研究総局 (DGER)」の責任者パシー大佐に手紙を書き、「クラン網」の認定に必要な手続きを尋ねていたが、返事がなかった。そのため、ド・ラ・ロックは7月5日、再度返事を要求し、その手紙に「あなたが、わたしへの返答を拒否することによって、フランスとその同盟国にたいしてわたしがおこなった奉仕を認知、認証しようとはせず、「クラン網」への資

²¹⁸⁾ *Archives Nationales*, F⁷ 15287. 注153) 参照のこと。

²¹⁹⁾ *Archives Nationales*, F1^a A 3239, 2 juillet 1945, procès-verbal d'audition de M. Charaudeau.

格付与とその実績確定の手続きを始めたくないとおもっておられるとは、どうしても信じることはできません²²⁰⁾」と書き添えた。

返事の期限を7月15日としていたので、「クラン網」の連絡員のひとりであったビエール・ロベールとアンドレ・ポルティエが返事を聞くために「調査研究総局 (DGER)」に赴いたが、局長のパスシー大佐はかれらに認証の拒否を伝えた。ド・ラ・ロックは連合国軍最高司令官アイゼンハウアーに手紙を書いて、とりなしを懇願し、7月14日には、臨時政府の首班ド・ゴールにたいしても、かれが受けている不当な扱いに抗議する手紙を差し出した。最終的な認証拒否が通告されたのは、ド・ラ・ロックの死後、1946年7月のことであったが、その拒否の根拠は、「クラン」は「アリバイ」の下部組織であり、その代表者のシャロドーは、連合国から固有の資金をあたえられてはいず、そのメンバーのリストも提供していなかったという事実であった²²¹⁾。ドイツの強制収容所からの帰国後、身体に加えられたすべての不当な扱いよりも、レジスタンス活動の認定を拒否されたことのほうが、はるかに大きくド・ラ・ロックを傷つけたにちがいない。

PSF自身の歴史は、第2次世界大戦後、フランス臨時政府の禁止決議と1946年4月のド・ラ・ロックの死によって、突如、終わりを告げた。後継組織が結成されたが、それは大きな政治勢力に成長することはなかった。

旧PSFメンバーによって創立された新しい党RFは、最初はかなりの数の支持者を集めたが、しかし、火の十字架団やフランス社会党 (PSF) のような大量の支持者を動かす力はず、警察の報告では、そのピーク時においても、メン

バーはせいぜい1万人ほどでしかなかった²²²⁾。党勢がそれほど伸びなかったことには、いくつかの理由があったとおもわれる。生まれつつあった組織にとって、ド・ラ・ロックの死が打撃となったことはまちがいないであろう。RFのメンバーはたえずド・ラ・ロックにたいする追慕の情を口にしたが、しかし、1946年夏にPSFにたいする禁圧が解かれ、その合法性が認定されたにもかかわらず、かれらはPSFを再結成しないことに決定した²²³⁾。

また、RFは、元PSFメンバーの多くの支持をかならずしもえることができない、きわめて競争的な政治環境のなかで活動しなければならなかった。元PSFメンバーのあるものたちは、「人民共和運動 Mouvement Républicain Populaire (MRP)」の支持者となった。レジスタンスに参加したキリスト教徒を主体として結成され、戦前のカトリック左派の流れを汲む人民共和運動 (MRP) の基本的な政策綱領のうち、選挙における家族の投票権、労使関係の改善、大統領の権限強化、過去の国内的対立を精神的革命の名において和解させなければならないという主張などは、すべて元PSFメンバーにとってはおなじみのテーマであった。そして、アルザス、マンシュ県、カルヴァドス県、ノール県など、人民共和運動 (MRP) が党勢を拡大した地方の若干は、以前はPSFが根づいていた地域であり、実際、1945年10月の憲法制定議会選挙では、ド・ラ・ロックは、かれの支持者たちに、RF自身は最近結成されたばかりで、まだ十分な役割を果たせないで、マルクス主義左翼の行動を阻止するために、必要などころでは人民共和運動 (MRP) の候補者に投票するよう指示していた。人民共和運動 (MRP) を支持した元PSFのメンバーの多くは、RFには加

²²⁰⁾ *Archives Nationales*, 451 AP, no.21.

²²¹⁾ J. Nobécourt, *op. cit.*, pp. 941-943; 剣持前掲書, pp.203-204.

²²²⁾ *Archives Nationales*, F⁷ 15284, rapport, 25 janvier 1946; Richard Vinen, *Bourgeois Politics in France, 1945-1951*, Cambridge University Press, Cambridge, 1995, p.177.

²²³⁾ *Archives Nationales*, F⁷ 15284, renseignements généraux, 6 août 1946, 24 mars 1947.

わらなかった²²⁴⁾。

さらに、1945 - 1946年には、シャルル・ヴァランの支持をえ、エドモン・バラシャンが結成にあたって指導的役割を演じた「自由共和党 Parti Républicain de la Liberté (PRL)」が、RFにとって容易ならぬ新しいライバルとなった。委員長はミシェル・クレマンソーであった。この党は人民共和運動 (MRP) より右翼的であり、その反共産主義はいっそう激しく、自由主義経済の擁護者であった。自由共和党 (PRL) は広範囲に元PSFメンバーのなかから党員を募り、1945年10月の総選挙では、元火の十字架団・PSFの主要な地盤であったセヌヌ県で健闘して、40ばかりの議席を獲得した²²⁵⁾。

自由共和党 (PRL) とRFのあいだには、友好関係はほとんどなかった。ド・ゴール派に加入したバラシャンとヴァランはド・ラ・ロックとの絆をいっさい絶ち、委員長のクレマンソーはド・ラ・ロックの友人ではなかった。とりわけ自由共和党 (PRL) 結成の結果、RFが元PSF支持者を引き寄せるのはいっそうむずかしくなった。ド・ラ・ロックは、生存中、自由共和党 (PRL) との協力にけっして賛成しようとはしなかった。かれの死後、RFのリーダーたちは、共産党を除けばRFの第1の敵は自由共和党 (PRL) であると言明した。かれらは、自由共和党 (PRL) はあまりにもセクト主義的であり、社会的には保守的であると主張し、マルクス主義者を打ち負かすことが最大の差し迫った問題であるような選挙の場合にしか、RFは自由共和党 (PRL) の候補者には投票しないであ

ろうとのべた²²⁶⁾。

PSFを建て直す努力が挫折し、強力な競争相手に立ち向かわねばならなかったRFは、やがて他党との連合策を取るようになり、1946年1月には、「共和派左翼連合 Rassemblement des Gauches Républicaines (RGR)」に加盟した。共和派左翼連合 (RGR) を形成する諸政党のうち、もっとも党員数が多かったのは急進党であり、ついでレジスタンス組織の広範な勢力をあたらしく結集した「レジスタンス民主社会主義連合 Union Démocratique et Socialiste de la Résistance (UDSR)」であった。

PSFの後継組織が、かつての「敵」、急進党やレジスタンス民主社会主義連合 (UDSR) のような中道左派の組織と提携することは、一見、奇怪な取り合わせにみえたが、その提携には多少の論理があった。共和派左翼連合 (RGR) は一般に中道派とみなされていたけれども、それを構成していた政党のいくつかは、ピエール・エティエンヌ・フランダンの民主同盟やポール・フォール (元社会党書記長) の「民主社会党 Parti Socialiste Démocratique」を含めて、ヴィシー体制下でペタンを支持した過去をもっていた (フランダンもフォールも1940年にペタンに全権を譲渡する法案に賛成票を投じた)。自由共和党 (PRL) と共和派左翼連合 (RGR) とのあいだには顕著な違いがあり、前者は反ペタンであったが、後者はペタン支持者を幹部として受け入れた。しかし、この両者の対立は、共産党の勢力拡大阻止に右翼や中道派の最大の関心があった1946年11月の第4共和制国民議会最初の総選挙では、さして問題にはならなかった。RFは、とりわけ、反マルクス主義者の団結に力を集中し、共和派左翼連合 (RGR) と人民共和運動 (MRP) だけでなく、必要とあれば自由共和党 (PRL) にも投票

²²⁴⁾ Andrew Shennan, *Rethinking France. Plans for Renewal, 1940-1946*, Clarendon Press, Oxford, 1989, pp.80-85; Robert Bichet, *La Démocratie chrétienne en France. Le Mouvement Républicain Populaire*, Jacques et Demontrant, Besançon, 1980, p.57; Claude Lelu, *Géographie des élections françaises depuis 1936*, PUF, Paris, 1971, p.238, carte 30; *Archives Nationales*, F⁷ 15287, renseignements généraux, 16 mars 1946.

²²⁵⁾ Jean-Paul Thomas, *Le Parti Social Français, Cahiers de la Fondation Charles de Gaulle*, 4, 1997, pp.52-53; R. Vinen, *op. cit.*, pp.115-136.

²²⁶⁾ *Archives Nationales*, F⁷ 15287, renseignements généraux, 16 mars 1946; F⁷ 15284, renseignements généraux, 6 août 1946.

すると宣言した。同様に、自由共和党 (PRL) のリーダーとなっていたエドモン・バラシャンは、元PSF幹部たちの支持をえて、かつて火の十字架団のメンバーでありヴィシー政権の支持者であったレジスタンス民主社会主義連合のフランソワ・ミッテランがニエーヴル県で議席を獲得するのを助けた²²⁷⁾。

RFは1954年まで共和派左翼連合 (RGR) との提携を続けたが、その後は、右翼の「全国独立派・農民センター Centre National des Indépendants et Paysans」に加わった²²⁸⁾。PSFの後継組織RFは、このようにして、右翼連合内の周辺の要素にとどまることに甘んじたのであった。

しかし、戦後、元PSFのメンバーが加わった政党は、後継組織のRFや人民共和運動 (MRP)、自由共和党 (PRL) だけではなかった。かれらはさまざまな運動に参加することにみずからの道をみいだしたのであり、それらのなかでもっともよく知られた運動は、第4共和制発足の3か月後、シャルル・ド・ゴールによって結成された「フランス人民連合 Rassemblement du Peuple Français (RPF)」であった。

経済的停滞、東西冷戦、植民地解放という戦後のあらたな国内、国際的環境のなかで無力を露呈した第4共和制の脆弱さに幻滅したド・ゴールは、フランスの政治制度をかれ自身の考

えに従って作り直そうと願って、1947年4月にフランス人民連合 (RPF) を結成した。かれは、第4共和制の諸政党にはフランスを再建することはできず、中・東欧におけるソ連の拡張主義に直面して国益を守ることもできないと主張し、フランス人民連合 (RPF) を、伝統的な政党としてではなく、あらゆるバックグラウンドの愛国者が参加できる「運動」として結成した。フランス人民連合 (RPF) は、行政権を強化し、資本と労働とのあいだの関係を改善するために、憲法改正を要求した。また、断固とした反共産主義であった。

フランス人民連合 (RPF) は、その結成直後には、めざましい勢いで躍進し、1947年10月の市町村会選挙では、比例代表制が導入された人口9,000人以上の都市で40パーセントの得票率を獲得し、その加盟者総数は1948年には150万人にも達したといわれる²²⁹⁾。しかし、その後、国民議会の選挙は1951年までおこなわれず、この年、フランス人民連合 (RPF) は119議席を獲得したが、この議席数ではその目的を達成するには十分ではなかった。この頃までには、同連合にたいする熱狂的な人気はすでに冷めていた。まもなくド・ゴールと同連合議員たちとのあいだで葛藤が生じ、1953年、議員グループはその母体組織との関係を断ち、2年後には、フランス人民連合 (RPF) 自体も消滅した²³⁰⁾。

フランス人民連合 (RPF) と火の十字架団、とくにフランス社会党 (PSF) とを比較するとき、両者のあいだには多くの明白な類似点が認められる。フランス人民連合 (RPF) は、その反共産主義、「弱体な」政治制度の弾劾、階級的和解の必要の強調などにおいて、フランス社

²²⁷⁾ R. Vinen, *op. cit.*, pp.170-180; Eric Duhamel, *Parti Radical et RGR*, in Gilles Le Béguec et Eric Duhamel éd., *La Reconstruction du Parti Radical 1944-1948*, L'Harmattan, Paris, 1993, pp.137-138, 147 note (37); La Réconciliation Française, *Cahiers d'information intérieure: Fidélité* (n. d.), *Organisation* (n. d.), *Ralliement* (n. d.); Pierre Péan, *Une Jeunesse française; François Mitterrand 1934-1947*, Arthème Fayard, Paris, 1995, pp.523-527.

²²⁸⁾ *Le Flambeau de la Réconciliation Française*, 5 novembre 1950, 27 mai, 24 juin 1951, novembre 1954, décembre 1956, novembre 1957; R. Vinen, *ibid.*, pp.234-251; Henry Coston, *Des Croix de Feu à la Réconciliation Française*, in Henry Coston éd., *Parti, journaux et hommes politiques d'hier et d'aujourd'hui*, Lectures françaises, Paris, 1960, p.80.

²²⁹⁾ 渡邊啓貴『フランス現代史 英雄の時代から保革共存へ』中公新書、1998年、p.44.

²³⁰⁾ Andrew Shennan, *De Gaulle*, Longman, New York, 1993, pp.56-73; Fondation Charles de Gaulle, *De Gaulle et le Rassemblement du Peuple Français (1947-1955)*, Armand Colin, Paris, 1998.

会党 (PSF) の多くの関心と共鳴していた。「旧式の政治屋連中」にたいするド・ゴールの攻撃は痛烈であり、1947年10月の市町村会選挙でフランス人民連合 (RPF) が大勝したあと、ド・ゴールが国民議会の早期解散を要求したことは、1938年にフランス社会党 (PSF) が新しい総選挙の実施を要求したことを想起させさせるものであった。運動のスタイルという点でも、フランス人民連合 (RPF) はフランス社会党 (PSF) から多くを取り入れたようにおもわれる。フランス人民連合 (RPF) は、地方特有の服装を着た子供たちがド・ゴールに花を贈呈するというような家族的イメージを演出した集団的示威運動を組織した。また、その示威運動は、しばしば、共産党の対抗デモとフランス人民連合 (RPF) の警備係との衝突を引き起こした。もっと一般的に言えば、ジャン・ポール・トマが指摘しているように、「フランス社会党 (PSF) とフランス人民連合 (RPF) は、伝統的な政治運動の世界とはまったく異なる出発点と、愛国的献身への違反行為以外は個人の過去を問わない神聖連合の永続的ヴィジョンを共有していた²³¹⁾。」

フランス社会党 (PSF) とフランス人民連合 (RPF) とのあいだには、人的な継続性もあった。幹部レベルでもっともよく知られた例は、自由共和党 (PRL) から移ってきたエドモン・バラシャンであり、かれは1952年までフランス人民連合 (RPF) の執行委員をつとめた。人的つながりは、それだけではなかった。1951年の国民議会選挙で当選したその119人の議員のうち、おそらく22人は火の十字架団あるいはフランス社会党 (PSF) の元メンバーか、すくなくともその同調者であった²³²⁾。

メンバー全体についていえば、フランス人民連合 (RPF) もド・ラ・ロックの運動も、ともに、その多くが中産階級から募られただけでなく、労働者階級や農民層からも支持をえようとした。両者とも、とりわけ社会問題にかんしては、信念の固い右翼から、もっと穏健な意見の持主まで、さまざまな政治的見解の呼びとをを引き寄せようとした。両者の地域的基盤については、フランス人民連合 (RPF) の運動はアルザス、ノール県、ロワール・アンフェリウール県できわめて活発であったが、それらの地方はすべてフランス社会党 (PSF) のかつての強力な活動拠点であった²³³⁾。すくなくとも、いくつかの地域では、かつてフランス社会党 (PSF) が展開した活動の結果、有権者たちは、政治路線の違いを超越した国民的団結の必要という、フランス人民連合 (RPF) のメッセージに敏感に反応するようになっていたにちがいない。

もちろん、フランス社会党 (PSF) とフランス人民連合 (RPF) とのあいだには違いもあり対立点もあったが、しかし、両者のあいだの親近性、類似性は否定することができない²³⁴⁾。

火の十字架団とフランス社会党 (PSF)、その後継組織の「フランス社会進歩 (PSF)」の歴史を知ることは、第3共和制末期、ヴィシー体制下、さらに戦後のフランスの政治、社会の動きを理解するうえできわめて重要である。極右同盟時代も、その後の合法政党時代も、ド・ラ・ロックとかれの同僚たちは、かれらの政治的敵対者たちを厳しく攻撃し、支持者獲得のために、しばしば言論と結社の自由という共和制の伝統を引き合いに出し、共和制原理への忠誠

²³¹⁾ A. Shennan, *op. cit.*, pp.63-65; J. -P. Thomas, *op. cit.*, pp.54-60.

²³²⁾ Jean Lacouture, *De Gaulle, II Le Politique, 1944-1959*, Editions du Seuil, Paris, 1985, pp.384-387; Gilles Le Béguec, *Antécédents politiques des députés RPF*, in Fondation Charles de Gaulle, *op. cit.*, p.339.

²³³⁾ R. Vinen, *op. cit.*, pp.218-223; Jean Charlot, *Le Gaullisme d'opposition 1946-1958. Histoire politique du Gaullisme*, Arthème Fayard, Paris, 1983, pp.86-89, 180-191; J.-P. Thomas, *Le Parti Social Français*, *op. cit.*, p.71; Jean-Paul Thomas, *Les Effectifs du Parti Social Français, Vingtième siècle*, 62, 1999, pp.82-83.

²³⁴⁾ S. Kennedy, *op. cit.*, pp.262-265.

を表明すると同時に、第3共和制の正当性を組上に載せ、その諸制度の根本的な改革を要求した。火の十字架団とフランス社会党 (PSF) が数万、ときには数十万の支持者を示威行動に動員したことは、フランスもまた1930年代ヨーロッパの民主主義の危機から免れなかったことを示していた。

1940年のフランスの軍事的敗北は、共和制を崩壊させたが、しかし、ヴィシー政権の国民革命への道を開き、当時のフランスの極右の目的の多くが実現されることを期待させた。しかし、実際には、それは数々の不幸で恥ずべき結果を招いた。ド・ラ・ロックとPSFはヴィシー政権からはほとんど排除され、最後には、ドイツ軍の占領に反抗するにいたったが、しかし、それにもかかわらず、かれらは、ヴィシー政府が軍事的敗北という大きな悲劇をもたらす最悪の結果にまで陥るのを阻止することに力を尽くした。

ヴィシー政権の国民革命の初期に特徴的な強力な政府への願望、本能的な反共産主義、極端な外国人嫌い、ユダヤ人排斥は、1940年の突如の軍事的、政治的破局をもたらしたのではなく、その根源は第3共和制末期の政治的、社会的発展のなかにあった。反共産主義と強力な政府への願望はド・ラ・ロックも共有したが、その行政権強化の要求は、戦後、大統領に強大な権限をあたえた第5共和制憲法の制定によって実現した。反ユダヤ主義は、フランスだけでなく、全ヨーロッパの社会の深層を広く蝕んでいた病巣であった。ド・ラ・ロックは、ドイツ軍占領下という拘束された状況のなかで、ヴィシー政府のユダヤ人排斥政策に譲歩を余儀なくされながらも、たえず自己の信念に立ち戻ろうとして、人種的偏見とたたかったのであった。

Le régime de Vichy et «le Progrès social français» – suite –

Yukiharu Takeoka

En France la crise économique, déclenchée au début des années 1930, a apporté le triomphe du cartel des gauches à l'élection du mai 1932, qui a débouché sur la prise de pouvoir par le parti radical. Pourtant, les gouvernements successifs du parti radical se sont révélés impuissants à vaincre le marasme économique. A la fin de 1933 sont mis au jour les escroqueries d'Alexandre Stavisky, qui ont compromis plusieurs hommes politiques. Les affaires Stavisky ont conduit, le 6 février 1934, à l'attentat des ligues d'extrême droite sur la Chambre des députés, qui s'est développé en émeute sanglante, suivie par la résignation hâtée du ministre Daladier et la formation du ministère de l'union nationale. C'est l'épreuve la plus dramatique qu'essuyât Paris depuis la Commune de 1871.

Les partis de gauche ont interprété cette émeute du 6 février comme événement suscité par les intrigues des fascistes. Il a fallu attendre la publication d'un article de René Rémond intitulé «Y a-t-il un fascisme français?» et de son livre sur *La Droite en France* à la décennie 1950, pour que soit remis en question le schéma, hérité parmi les forces de gauche, des impératifs simplificateurs du combat antifasciste.

La parution des ouvrages de René Rémond a renforcé le consensus des historiens universitaires français pour lesquels il n'y a eu de fascisme français que marginal pendant l'entre-deux-guerres.

Mais, la tentative d'interprétation du fascisme français d'un historien israélien Zeef Sternhell (*Maurice Barrès et le nationalisme français*, 1972; *La droite révolutionnaire. Les origines françaises du fascisme*, 1978; *Ni droite ni gauche. L'idéologie fasciste en France*, 1983), qui considère que le fascisme français a été un phénomène de première importance et qu'il a pu dès avant 1914 servir de matrice à ses homologues italien et allemand, a ravivé le débat sur l'existence d'un fascisme à la française.

La clef de ce problème est les Croix de Feu et son organisation successive, le Parti social français, dirigés par le colonel François de La Rocque, en raison de l'importance de leurs adhérents.

Dans les 5 tomes précédents de cette revue (*Osaka Economic Papers*, vol.59, t.2 et 3, septembre et décembre 2009, vol.60, t.2, 3 et 4, septembre et décembre 2010, mars 2011), nous avons publié les articles dans lesquels nous avons examiné, en particulier, si on peut qualifier de fascistes ces deux organisations, en étudiant leur idéologie et leur action dans le climat politique et social en Europe des années 1930. Par la suite de cette étude, nous avons affirmé que le mouvement de F. de La Rocque n'était jamais fasciste.

Après la défaite militaire de la France et la débâcle de sa troisième République en 1940, le Parti social français s'est transformé en Progrès social français. Dans cet article, nous avons traité de l'activité de La Rocque et de son mouvement sous le régime de Vichy.

Classification JEL: N44

Mots-clés: Progrès social français, régime de Vichy, résistance